阪神大震災 : 保健所からの報告 . - 発行:神戸市中央保健所, 1995.7. 請求記号:震災-10-224 p.7-9

1. 序章　長い長い戦いの幕開け

1月17日　思い出すままに

衛生課長　衛生監視員　森本征生

猛々と、何ケ所からも立ち昇る黒煙と炎。フロントガラスに降り注ぐ煤煙。陥没や亀裂が入ったり倒壊物で通れなくなった道路を避けながらただひたすら三宮に向かって車を走らす。

見るかげもなく破壊された兵庫県薬剤師会館や山手栄光教会。押し潰されて一階部分がなくなってしまった全但会館等々、いたるところでビルや家屋が倒れあるいは傾き、そのかたわらで虚ろな眼差しでたたずむ人々。まるで映画のセットのような見る影もない惨状の中、ようやく赤いレンガの建物を確認できたとき思わず「アッ、あった！建ってる！建ってる！」と叫び、ほっと胸を撫で降ろす。

崩れ落ちたり亀裂が入った区役所の壁面に改めて驚きながら一気に5階まで駆け上がると、ロッカーというロッカーが倒れ、散乱する書類や機器類の中に“門間”“臼杵”“尾上”の三名が茫然と立ちすくんでいるのが目に入った。

「オー！ご苦労さん！えらいことやなナー！みんな無事やったか？」

「何時頃来たん？　どなして来たん？　誰が来てる？」と、立て続けに聞く。

「この三人だけで、さっき来たとこです！　門ちゃんなんかいつもより早う来たんやて！」

「私、8時半頃着いたんよ！ここまで歩いてきたんよ！」と泣きそうに言う。

お互いの無事を確認し、喜び合い、倒れたロッカーや机を乗り越え飛び移り、床に飛び散った書類や文具類を踏みつけながらやっと自分の机にたどり着く。

とりあえず加納保健課長の机を電話等の応対ができる場所とするため、その周辺を簡単に片付けるとともに、倒れたロッカーや机、散乱する書類等を横へ押しやり事務所入口から保健課、衛生課へと歩け

る通路を確保した後、三人に留守を頼み区対策本部に駆け降りた時にはすでに昼の12時を回っていたと思う。
　中央区災害対策本部は1階福祉事務所内に設置されており、十数人の職員が電話にて区内の被災状況の把握、物資の調達、本部に訪れた被災者の対応に追われていた。ある者は大声で苛立ちを顕にし、ある者は泣きそうな顔であり、一刻も早く状況を掴みたい、何とかしたいという思いが全員に如実に現れていた。
　壁や窓ガラスには大きな中央区の地図、避難個所や避難者の数、市本部等諸機関の連絡先等々のものがところ狭しと貼り出されており、次々に入ってくる被害状況が書き加えられていた。テレビには神戸・淡路・西宮等の被害状況が刻々と報道されておりその被害の甚大さ悲惨さを横目で見、耳で開きながら皆悲痛な面持ちである。
　このような状況の中では、十分な情報も得ることは困難でありとりあえず事務所に取って返すと公衆衛生課大久保主幹から
　「西市民病院が倒壊し、患者を他の病院に転送しているが車と人が足らない。ありったけの車と人の応援を頼む。」
　と、悲壮な声での電話要請である。
　直ちに、昼食もまだの尾上と臼杵の2名とミストカーと保健所連絡車（ワゴン）の2台を派遣する。
　後に残った門間には、職員の安否の確認をすべく可能な限りの電話をするように頼みながら、区対策本部と事務所との間を何回か上り下りをしていたが、この間にも「ゴー、ドドドーン」と震度何度かの余震が幾度となく襲いかかり、また、ただ一本外部に通じていた外線電話も3時すぎには事務所からはもちろん外部からも全く通じなくなってしまい、庁内電話のみが外部への唯一の連絡手段となってしまった。

　午後4時半過ぎ、区対策本部より保健所において救急医療班の設置要請があった。
　急遽庁舎外の公衆電話を使用して各保健婦への電話番号を押すがどの電話も「ツー」とも「ピー」とも言わない。
　『何とか誰かに連絡を』といらいらしながら、住所録と10円玉を握り使用可能な電話を捜し求めてうろうろしていると、「三宮駅から西は通じるみたいだ」と話している声が聞こえた。急いで電気の消えた薄暗いJR三宮駅の構内や橋脚が傾いたJR・阪急高架下から、何階かの部分が押し潰された交通センタービル下を通り、ようやくセンタープラザ下で使用可能な電話を見つけ、中瀬Drを始め何人かの保健婦へ連絡をしたが連絡の取れた誰もが何らかの被害を受けた模様であり、とてもすぐには出勤できる状態ではなかった。
　『よし！誰かが出て来るまで本庁へ応援を頼もう』と思いたち、本庁へと駆け出す。
　2号館の5・6階部分が押し潰されたり、1号館と2号館との渡り廊下が損壊するなど本庁そのものも甚大な被害を受けてはいたが、さすがに1号館は悠然と無傷な姿を見せていた。
　大勢の避難者でごった返す1階から階段をフーフー言いながら6階の衛生局対策本部にたどり着くと、局長以下各課の課長や主幹あるいは担当者等が市内医療関係施設の被災状況や医療機関における診療状況等の収集に当たっており、西市民病院倒壊という大惨事もあってか誰もが殺気だっていた。そんな中、中前庶務課長と宮野主幹の二人に向かって
　「どこかの保健所に医師と保健婦の派遣を要請して欲しい！それに医薬品も！」と大声で依頼する。
　「何でや！あんたとこの職員は？保健婦はどないしたんや？」と庶務課長。
　「ほとんど連絡がつかへん。ともかく対策本部から医療班をと言われているし、保健婦さん1人だけでも何とか頼みます！」
　「よし！行けるかどうか兵厚保健所に電話してみるわ」と宮野主幹。

何とか、兵庫保健所から1名の保健婦に駆けつけてもらえることとなり、「医薬品も頼みますよ！」と念を押した後、部屋を飛び出る。
既に5時半は過ぎていたと思う。あたりは既に薄暗く、区役所に帰る歩道には人も疎らであり、昨日まで華やかに点滅していた各種のネオンや街灯もほとんどが消えてしまっており、刻一刻と闇夜が迫ってくるような感じであった。

区対策本部では、消防署救急隊の隊員が待ち受けており、
「救護班はどうですか？まだですか？あそこに怪我をした人が来てますが」と入口の椅子で顔に白い布か何かを当てて座っている人を見ながら聞かれる。
「人員の手配ができました。もうちょっと待ってください。」
と、とりあえず救急隊員に処置を依頼し、兵庫保健所からの応援に期待をかける。
6時半頃、大野保健婦が息せき切って階段を昇ってきた。
「ありがとう！さっそく1階の本部でお願いします。」と労をねぎらう間も無くすぐ降りてもらう。
やがて、中瀬Drも駆けつけやっと救護班が曲がりなりにも設置できたのは、7時過ぎであった。
しかしながら、本部に張り出されたりテレビで報道される被災の状況からして、今後どのような事態になるかも想像もつかないため、すでに出勤していた馬場に
「電話の通じるところをとにかく探してくれ。そして連絡のつく保健婦全員になんとか出てきてもらうよう連絡してみてくれ！」
と1名でも2名でも出てきてくれることを期待しながら頼む。
やがて、何時頃であったか衛生局本部より、
「日赤医療班が1時頃に到着するので、本庁まで迎えに来てそのまま避難所へ案内をしてほしい。」
との連絡が入る。
この医療班が、この後全国各地域からまた各団体から続々と駆けつけていただいた医療班の第一陣であったが、この時点ではまだまだ実感として次の日から数ケ月も続く本当に大変な医療活動になろうとは思いもよらなかった。ともかく、保健所の救護班も設置され、日赤医療班も到着するということで、何となくほっとしたものである。
その後、赤堀保健婦も出勤し明日以降の段取を、また、西市民病院から遺体や患者を搬送し終えた二人は、休む間もなく医療班の案内に、衛生局からは新たな救護班の到着を知らせて来るなど、瞬く間に時間が過ぎ、気が付くと18日の払暁を迎えていた。

今考えても、この間自分自身では冷静なつもりであったが、随分興奮をしていたのであろう。いったい何をしてきたのか、時間的な経緯も全く記憶にない状態である。また、あのような中で、本当に的確な判断や指示ができたのであろうかと疑問であり、こうすれば良かった、ああすれば良かった、と思い直すことばかりである。
しかしながら、職員全てが被災者である中、家の後片付けもそこそこに朝早くからあるいは何時間もかけて出勤してきた極少数の職員や、兵庫保健所から急遽応援に駆けつけていただいた大野さんのおかげでなんとか医療の初動活動が開始でき、18日の業務に引き継げたこと。しかも飲食もままならない中、不眠不休でただひたすらに頑張っていただいたことは、職員として当り前のこととはいえありがたいことであり、本当に感謝に耐えない次第である。

今後このような大惨事が二度と起こらないであろうことを念じながら、一日も早くもとの姿に甦った神戸を見たいものである。

(c)1995神戸市中央保健所(デジタル化：神戸大学附属図書館)

阪神大震災 : 保健所からの報告 . - 発行:神戸市中央保健所, 1995.7. 請求記号:震災-10-224 p.10

不安で長い1日

保健課　事務職　門間　香苗

何があったのかわからないまま屋外に出た。ガスの匂いや遠くに見える火と煙をみても事態を深刻に受け止めることができなかったように思う。このままでは電車も止まるし、歩いて出勤するならそろそろ家を出ようと思い、着替えて家を出た。保健所までの一時間足らずの道程を進んでいくうちに、つぶれた民家やビル、少しずつ不安になっていった。

市役所のあたりにきて、2号館がつぶれているのを見て保健所もだめかもしれないと思った。庁舎に到着。区役所等の職員数名がすでに出勤していた。とりあえず5階のカギをもらって事務所に行った。何をすればいいのかわからず、とりあえず少しずつ片付けをはじめた。8時45分を過ぎたころに電話があり、電話をとろうとしても電話のところまでなかなかたどり着かなかった。職員からの電話をとっていると「今日は出勤できない。」という言葉を何度か聞いているうちにとても心細くなった。衛生課の尾上さんと臼杵さんが出勤してこられ、区役所より災害対策本部の会議をするので出てくれるよう要請があり尾上さんたちが会議に出席された。11時半頃に森本課長がこられ、課長の指示で職員の安否確認のため職員の自宅に電話をかけたが半数以上は電話が通じない。テレビもつかない状態の中でどの地域がひどいのかもわからず不安になった。衛生局健康増進課よりの依頼で中央区内の各病院に病院の建物の被災状況と地震による患者の来院状況を調べるために電話をかけたがこちらもはとんど通じなかった。病院に電話をした際に「死者だけでも30人はでている。」という言葉を聞いてはじめて死者がでるほどの惨事なのだと実感した。そうしているうちに、保健予防課から「西市民病院がつぶれたので患者の搬送のために車を出せるだけ出して欲しい。」との連絡があり尾上さんと臼杵さんがミストカーと保健課の公用車でむかった。保健所に残り病院への連絡と職員宅への連絡を続けた。4時半頃になって帰宅した。

翌日、昼前頃に衛生課羽達さんと出勤、前日より続いていた職員宅への連絡等と福祉事務所での救護活動が始まっていた。本庁に粉ミルクを取りに自転車でむかった。大きいサイズが2缶、小さいものが5缶詰程度しかなかった。12時過ぎごろに加納課長が出勤され、課長の指示で医師会より病院、医院の開院状況の連絡をうけたり事務所の片付けをしているうちにあまりにも短い1日が終わった。その後、数日間は主に医薬品等の受渡をした。物資の少なさと慣れない作業に苛立ちを覚えた。

まばたきするのもおしまれるほど、一瞬に過ぎたようにも、何日間もたったようにも思われた1月17日でした。

「良い体験をした。」というにはあまりにも悲惨な出来事でした。今後の震災時にあのように不安な日が一日でも少なくなるように震災の記録がいかされればと思います。

(c)1995神戸市中央保健所(デジタル化：神戸大学附属図書館)

阪神大震災 : 保健所からの報告 . - 発行:神戸市中央保健所, 1995.7. 請求記号:震災-10-224 p.11

保健所医師としての対応

元　保健課主査　医師　中瀬　克己

地震当日は、保健所はどの様な役割を果たすべきなのか理解できなかった。それは、救急医療（救護）と保健所とを切り離して考えていたからであり、またわが家の回りに全くと言っていいほど災害が現れていなかったからでもある。地の12時間後に職場に赴き救護班の一員として働く事となった。しかし、医療を保健所に求めてくる人は少なく、災害時における公的な救護という概念を持っていなかった人は私始め多かったようである。避難場所であった中央区役所は保健所と同じ建物にあり、その内の被災者に簡単な外科的処置を行い、相談に当たった。応急的な外傷の処置などの一次的な医療への対応が求められている事を感じる中で、夜半に検死の依頼があった。と言っても依頼主も何を頼むべきなのか解っていない状況であり、医療の知識と行政的な手続きをどうすべきなのかを求めたのであろう。保健婦とともに現場に赴いた。死亡の診断や死体の検死に関連して困っていた被災者は、他にもあり2、3日の内に数件の相談にあたった。保健所の業務との関連で考えるなら健康相談の延長とも言える。保健所内が目茶目茶であり基礎とすべき資料や法的根拠に当たる事ができなく困った。また、診療の面では通常治療を行っていない職場であり、過去の経験と常識に従って行動する事となった。

17日の深夜には援助の医薬品が市役所に届き、保健婦とともに外傷を念頭において応急処置のをした。17日夜には日本赤十字などの医療チームが既に巡回診療を始めており、保健所職員による救護チームの担当すべき役割を考えた。治療から離れた日常業務の内容から、一次的な応急対応を行う事とした。また救援の医療チームが規模の大きい避難所から巡回すると考え、小規模の避難所を巡回する事とした。救出活動との連携や系統だった巡回救護が今後の課題であろう。広い視野で救護を考える事ができなかったが、災害は自分自身の精神状態にも影響を及ぼしていたようであり、系統だった活動にはマニュアルを用いたチェックが有効ではないか。

保健所職員による救護チームは、医師、保健婦および運転担当者であった。臨床における役割分担を踏襲し、医師と保健婦がチームとなり業務上道に詳しい衛生課監視員が運転に加わった。処置が主でありわずかの投薬や薬品についての指導は自ら行い、医薬分業の体制は当初無かった。この段階では診療記録を残す事は念頭になく、反省させられる。救護に当たって、医師にはチームリーダーの役割が求められた。また保健所に帰った時には区役所内の救護所の整備や運び込まれる援助の医薬品・衛生用品等の配置といった次々対処すべき事が現れた。援助に来られた医療従事者への依頼内容を含め、医師にはこれら医療関連の仕事のとりまとめが期待された。災害直後は自ら救護に巡回する事が求められていると考え、保健所内で常時即応が求めやれた救護班の配置や救護所とのコーディネイトといった業者は担当しなかった。

(c)1995神戸市中央保健所(デジタル化：神戸大学附属図書館)

阪神大震災 : 保健所からの報告 . - 発行:神戸市中央保健所, 1995.7. 請求記号:震災-10-224 p.12-13

震災当日、2日目

兵庫保健所　保健婦　大野真喜恵

1月17日、午前5時46分、震度6の地震発生。午前11時頃、勤務する兵庫保健所からの連絡網で「歩いてでも出てきて欲しい。」という指示がありました。午後1時30分、同僚保健婦と兵庫保健所に到着。ここでは、散乱した室内から救急カバンを取り出したり、仕事をしやすいように机や棚を片付けたり、被災した病院の入院患者約50名の移送先を電話で探したりしていました。また、「子供用のミルクが欲しい。」と言う区役所からの問い合わせに、母子栄養食品用のミルク缶を探し出して渡したりしました。そんな仕事をしていた私が、中央保健所に行くことになったのは、午後4時20分頃にあった衛生局からの電話でした。「中央保健所には、保健課の職員が一人もいない。できれば保健婦が一人いってくれないか。」という内容でした。その時点で兵庫保健所には、所長を始め、12名程の職員がいましたので、昨年まで中央保健所に勤務していた私が、行くことになりました。

車はない、歩いて行ってくれ、と言うことでしたが、たまたま所内にあった自転車に乗って、午後4時30分に出発しました。段々と夕闇が迫りつつある道を、瓦礫を避けながら自転車に乗ったり歩いたり。着のみ着のままで荷物を持った人々が不安そうに歩いていました。兵庫県庁の前を通り、煌煌と照らされた灯りにホッとなったり、崩れた教会に驚いたり、つぶれた大丸百貨店、阪急三宮駅など信じられない光景を目に焼きつけながら、暗くなってやっとたどり着いた中央区役所。到着時間は、午後5時20分頃でした。区役所の中は、被難住民の人々が詰めかけており、一様に疲れきった表情で座りこんでいました。鉄骨のむき出しになった階段を5階まで上がり、兵庫よりひどい中央保健所の惨状に驚きながら、衛生課長に到着を報告しました。

中央保健所では、4階会議室に応急手当の場所を作っているということでしたが、全く患者は来ません。1階福祉事務所や2階ロビーにいる避難住民に「ケガはないですか。具合の悪い方はありませんか。」と大声で言いましたが、誰からも返事はありませんでした。中央区では、1階福祉事務所の奥が、区の対策本部になっていましたので、私も必需物品を持って本部に近くに移り、情報を得ながら、窓口や電話での対応を始めたのです。

相談内容は、「今日が受診日だったが、どうすれば良いか。」、「透析を今日受けなければならなかったが、どうしたら良いか。」と言うものでした。衛生課長を経由して、衛生局に問い合わせたり、私自身で判断して答えられる事は、その場で返事をしていきました。

一番つらかったのは、窓口に来た乳児の母親が、「家がつぶれて水もミルクもない。子供は風邪で発熱しており、泣いて機嫌が悪い。どうして何も無いんですか。」と訴えたことでした。そして、「役所は何もしてくれない。早く何とかして下さい。」と言い、帰ろうとしませんでした。食物などの救援物資も来ておらず、保健所内を探してもミルクも哺乳ビンも何もありません。「お母さん、ごめんね。悪いけど明日の朝まで待って欲しい。赤ちやんはお母さんがそばに帰ってくるのを待っていると思うし、早く帰ってあげて。」と言ってなだめて帰しました。せめて、非常用の食料、ミルク、毛布などあれば、渡してあげることができたのにと残念でなりませんでした。

午後8時頃に中央保健所医師と保健婦1名到着。午後9時頃には、日赤医療チームによる避難所の巡回診療が始まったと開きました。深夜、テレビでは、長田区から須磨区の火災を報じていましたが、中央区管内でも何ケ所か火の手があがったと聞き、保健所の消火器を取りに行ったりしました。窓の外では、ひっきりなしに走る消防自動車と救急車のウーウーという音が室内まで響いており、この音は、震

災後2週間ぐらい私の耳の中で鳴っておりました。

18日午前4時30分、他都市から医薬品などの救援物資が届いたという事で、市役所に取りにいきました。送られてきた医薬品や衛生材料を見て、本当にありがたい事だと感謝の気持ちで一杯になりました。持ち帰った支援物資を避難所に持って行けるようセットする作業を行っているうちに、やっと震災2日目の夜明けを迎えたのです。棒のようになった足をひきづりながら、昨日から今日にかけて私は、1階から5階までを何往復しただろうか。余震のたびに揺れる庁内に、もしかしたら、死ぬかもしれないと思いながら仕事をしたことなどを思い出しました。2日目の朝、8時頃より、中央保健所保健課のスタッフが何人か到着。前日からのことを引き継ぎ、午後1時過ぎに一旦帰宅した私は、翌日から再び、兵庫保健所に出勤し、巡回診療についてまわりました。

今回、震災当日から2日目の私自身の行動を振り返り、もっと何かできたのではないかという反省もたくさんありました。他保健所から駆けつけたという事で、遠慮した部分もありましたし、寒さと睡眠不足で身体が動かなかったこと、もっと仲間がいれば協力しあって救援活動に役立てたのではないかという思いもありました。私のこの時の体験が、今後の震災時等の保健活動にいかされればと思いました。

(c)1995神戸市中央保健所(デジタル化：神戸大学附属図書館)

阪神大震災 : 保健所からの報告 . - 発行:神戸市中央保健所, 1995.7. 請求記号:震災-10-224 p.14

18日と19日の活動

保健課　保健婦　藤原智恵子

私が出勤したのは、18日の朝8時前だった。通勤の足がないため、7時すぎに知り合いのタクシーで自宅を出発し、新神戸トンネル（料金所は無人であった）を抜けたのだが、その時の三宮周辺は、建造物はまるでゴジラ映画を見るように、壊れており、1日たっているにしては、あまりの静けさに少々戸惑いを感じた。そして、中央区総合庁舎が建っているのを見てほっとしたものの、次の大きな余震で、市役所2号館や西市民病院のように、保健所のあたりの階がぺちゃんこになるのではないかと不安にもなった。あちこちに亀裂の入った階段を上る途中、前日から食事も摂らず不眠不休でがんばっておられた臼杵さんと、尾上さんに出合い、勇気付けられた。

職場は、予想通り、全ての什器類が移動したり、倒れていたりしていたのを、それまでに出勤していた職員が、なんとか通路だけを空けたような状況だった。前日から泊まったままの職員の中には、兵庫保健所から応援に来て下さった大野さんもおられ、大変申し訳なく思った。その場にいた職員に、持参したお茶とおにぎりを出し、ひと息着いたところで、前日からの経過を聞いた。職場は、電気はきているが、水・ガスは出ず、電話もほとんど不通で、職員にすら連絡の取れていない状況であった。また、1階に救護所を設置し対応しているが、来所者は少なかった様子である。その中に、粉ミルクを希望される方がいたが、所内になかった為、本庁から取り寄せられ、数缶届いていた。また、応援の救護班が、避難所を巡回しており、保健所も今後、医薬品等を避難所に届ける為に、本庁からの分も合わせ、その時所内にあったものはすでに、紙袋20袋程に小分けされていた。

その後、職員の安否確認を、比較的通じやすい公衆電話で引き続いて行い、昼前には、保健婦が複数となったので、医療チームの巡回していない小規模避難所へ、衛生課の車に前述の医薬品を積み、馬場さんの運転で、中瀬医師と共に、出発した。区対策本部の資料を基に7ケ所程巡回し、医薬品を置き、各所で5人前後に対応したが、いずれも比較的軽症と思われる切創・打撲・火傷であり、受診が必要な方は、すでに受診を済まされていた。しかし、訴えの長い方がおられたり、処置に適当な物品が不足していたりで手間取り、私達が戻ったのは、夜7時を過ぎていた。保健所に帰ってからは、6階にある医療機材で、使用可能なものを5階に集めるなど、次回の避難所巡回に備えて準備した。

19日は、職員の多くが出勤でき、救援物資も一層多く届き始めたが、絶対量が少ないのと共に、次回届く予定が全く不明なため、どうすれば平等に配分できるかに悩まされ、配布のための作業に多くの時間をとられた。特に、粉ミルクは、2－3回分ずつ計って分けたり、紙おしめはカバー不要のものと従来のものをセットしたのが印象に残っている。

(c)1995神戸市中央保健所(デジタル化：神戸大学附属図書館)

阪神大震災 : 保健所からの報告 . - 発行:神戸市中央保健所, 1995.7. 請求記号:震災-10-224 p.15

救援物資と救護所に振りまわされた1日

保健課　保健婦　片山　寿子
保健婦　岩崎　理絵

1月19日、早朝、救急車のサイレンがけたたましく鳴り続ける中央区に車で2時間かけて到着する。

震災後始めての勤務で何をすればよいのかわからないため同僚から引き継ぎを受け、1日の行動を計画した。5人の保健婦のうち、2人は救護班と共に避難所で救護活動をする、あとの3人は救援物資の仕分けと本部救護所での活動とに役割を分担した。

私達は後者だったため早速1階の本部救護所で前日に各避難所の乳幼児の人数をおおまかに把握していたのを参考に避難所毎にミルク、おむつ、離乳食を仕分けし、数十ケ所分あるため他のスタッフにも協力してもらった。ミルクが不足しており1人に2日分しか渡せない。1缶をビニール袋に2回分ずつ分けるための計算をするのに気持ちが焦ってすぐにできない。机の上は物が散乱しており記入する紙や筆記用具がない。早くしなければと気持ちだけが焦る。直接ミルクを取りに来所された人に少量しか渡せず空しい気持ちだったが苦情を言われる人は少なかった。お湯や水が同時に必要となり、福祉事務所の電気ポットのお湯や飲料水の配布場所を案内した。

物資と救急薬品の仕分けのできた避難所から配布を始め、近い所は保健婦が自転車で運んだ。避難所に出向いている救護班や各避難所から要望のある医薬品をセットし運転手に運んでもらった。その間も外傷をした人や気分不良を訴える人、医療機関の診療可能な所を教えて欲しい等いろいろな人が来所し、対応に追われ記録をする暇もなかった。事務所で毛布にくるまってボーつと座っている避難者達をまるで視野に入っていないかのように声をかけることもなく動いていた。

衛生課の車が空いたため、セットしておいた医薬品と物資を避難所に配布することになり、車に積めるだけ多く積み込み飛び乗る。倒壊した家屋やビルの間のでこぼこの道路を走り、斜めに傾いたビルの下を通過し中央区の西から東へと何ケ所もの避難所に配った。ポートアイランドから大渋滞で前進しなくなり困っていたところ、偶然居合わせたパトカーに安部監視員が救援物資と救急薬品を避難所に運ぶので先導して欲しいと訴え、渋滞に巻き込まれていた中央市民病院の応援医師達も同じように要求された。警察は「目的地まではだめだが、神戸大橋を渡るだけなら先導するから着いて来るように」と言い数台を先導してもらい、なんとか時間をかけずに移動できた。街は信号も機能せず交通ルールはなくなっていた。どの道も混雑しており、避難所を有効的に回る計画をするべきであったがその点では計画性に欠けていた面があった。

臨時に設置された救護所は福祉事務所の奥にあり医療物品がわかりにくく即座に対応しにくかったため、処置しやすいように整えなければならなかった。夜、やっと落ち着いてきたのでボランティアの看護婦と医療物品を福祉事務所の入口右側に移動させ相談室を診察室にし、翌日からの体制を整え1日が終わった。

(c)1995神戸市中央保健所(デジタル化：神戸大学附属図書館)

阪神大震災 : 保健所からの報告 . - 発行:神戸市中央保健所, 1995.7. 請求記号:震災-10-224 p.16-17

1月17日夜からの救護活動

保健課　保健婦　赤堀　公子

1月17日夜になって保健所から、誰か保健婦に来てほしい、との連絡を受けバイクで出かけた。予想池り幹線道路は大渋滞でサイレンの音がけたたましい。わき道に入ると真っ暗で、亀裂があったり瓦礫で塞がっていて思うように進めない。到着したのは、7時過ぎであった。

1階が騒々しいが、とにかく5階へかけ上がった。事務所はめちゃくちゃで足の踏み場もない。衛生課長が電話の対応をされ、兵庫保健所からの応援保健婦が1階にいるとのこと。1階には、区の対節本部が設置され、テレビの声と被害状況の発表や職員への指示でざわついていた。すでに救護活動をしてくれていた保健婦に状況を聞いた。区役所に避難してきた人々には、けが人はいないようである。しかし、1階のベンチに座っている人たちは皆疲れきった表情で静かに肩を寄せ合っている。

乳児の父親がミルクを求めて来たが見つからないと聞き、5階まで上がってもう一度探す。やはり見あたらず、誰かがお湯だけ沸かしてくれていたが今夜のところは帰ってもらう。申し訳ない。
明日までになん。とかせねば…。

やがて福祉事務所の係長から医師に避難所の検死を依頼され、けが人もいるようなので一緒に出かけることになる。6階の処置室から消毒液、滅菌ガーゼ、ゴム手袋等を、倒れて割れたガラスケースの中からできるだけたくさん取り出す。車で向かう途中、死亡診断書を葺合警察まで取りに寄って避難所へ向かう。国道2号線は犬渋滞で、1時間ほどかかって着いた。

遺体は講堂に安置されていた。棺に3体、布団に4体、家族が付き添っている。全く静かで悲しくなった。既に警察の人が来ており、検死はよいとのことで、手を合わせて立ち去る…

けが人はいないか声をかけて回った後、空いている部屋で手当をした。頭に時計や、タンスなどが当たってけがをした人が何人も。いる。自分では見えないので、放っておいたようだが、縫うほどの傷なので、明日、外科へ行くよう勧める。足のけが、手の傷などいろいろある。大柄な中学生が遠慮がちに入ってきた。腕から手にかけて内出血や、切り傷、手のひらは真っ黒でとげが刺さっている。朝からずっと生き埋めの人の救出をしたという。感謝の気持ちでいっぱいになった。真っ黒な手は、アルコール綿で拭くようにたっぷり渡すが、大丈夫です、と行ってしまった。直後に、今助け出されたばかりの小学生を見てほしいと毛布をかぶった男の子が連れられてきた。1年生か2年生のその子は半袖半ズボンの体操服で、裸足で震えている。けがも、痛いところもなく、元気いっぱいでほっとする。医師と自分達のポケットを探し、カイロと軍手を見つけて渡した。明日のためにと応急処置用の薬品、衛生材料を置いて区役所に帰る。

差し入れのおにぎりを食べているうちに深夜となり、日赤の医療班第一便が職員2人の案内で避難所に出発したと聞く。今後のことを話し合い、4人は泊まり、私は帰らせてもらうことになった。保健所からは電話は内線しかつながらないので、途中の公衆電話から、来れない同僚と上司に今日の報告と明日の予定を相談し帰宅した。午前3時半であった。

1月18日朝、職員は10人以上になっていた。1階で倒れている人がいると聞きとんでいく。女性が引きつけている。医師の指示した適当な救急薬品もなく、毛布で保温し救急車を待った。保健所の方には、ボランティアの女性医師が援助を申し出て来てくれた。1階の救護所をお願いすることになって、保健所医師は保健婦と近辺の小さな避難所へ救護の巡回に出かけた。

やがて、既に2000人規模の避難所を巡回している医療班の他に3班送ったと本庁から連絡があった。

残った私たちは、1000人規模の避難所を優先に地図を見ながら巡回コースを組む。避難所の場所や、交通事情が十分把握できず苦労する。そこへ先発の医療班から連絡がある。けが人が100人位並んでいるので次に予定している避難所は他の医療班に行ってもらいたいとのこと。苦労して立てた3班の医療班の巡回コースを変更する。また電話、その次の避難所にも行けそうにないと。いったいどれだけのけが人がいるのだろう、と不安を募らせていると保健課長が車、徒歩、バイクと乗りついで到着。課長席付近はすぐに仕事のできる状態に整った。本当にホッとした。お弁当を大量に買ってやってきた職員も到着。

大変なことになった、何とかしなければと思いながらも次々と断片的に入る情報に振り回される2日間であった。情報不足、電話、交通手段の寸断で今後の予測もつかぬ非常事態であった。そのうえ余震も続き、自宅や家族の心配もしながらの救護活動であり、事態と十分に向き合えない自分であったと反省する。

(c)1995神戸市中央保健所(デジタル化：神戸大学附属図書館)

阪神大震災 : 保健所からの報告 . - 発行:神戸市中央保健所, 1995.7. 請求記号:震災-10-224 p.18

私の「震災記録」－ささやかな体験から－

衛生課　事務職　羽達　祐子

大震災から一夜明け、1月18日、保健所には応援の医療チームの方々が到着し始め、医師、保健婦を伴い各避難所へ向かわれた。また、区内の道路、地理に詳しい者は、同乗し道案内を努めた。災害時の保健所の任務分担は「救護活動」とされる。医療職以外の者は直接にはかかわれない。自分にできることは何か。道も知らないし、なんともどかしく歯がゆい。ともあれ、じっとしている訳にも行かず、メチャクチャ状態の部屋の中を少し片付けようともしたが、そんなこと急ぐ必要もない。もっと他に今すぐしなければならないことがあるはずでは？とまた気ばかり焦ってくる。1階の災害対策本部へ何か手伝えることはないか申し出てみた。人、人でごった返し、この災害がただごとでないことを実感させられる。福祉事務所保護係の片隅で窓口対応にあたる。自宅が壊れ、避難所にいる人達からは、昨日から何も食べていない、毛布もない、一体いっまで放っておくのか、見殺しにする気か、といった苦情が相次いだ。皆、寒さと飢えと不安で殺気立ってきている。しばらくしてボランティア医師が来られ、1階に待機して頂き、「救護」の看板も立てた。
患者は多くはなかったが、5階保健所との連絡に内線電話も思うようにつながらず、1階と5階とを往復することになった。

3日め19日は、朝から粉ミルクの小分け作業をした。ようやく救護物資が届き始めたのだが、数が少ないし、後からも届くものやら分からないため、とりあえず今ある分を公平に分けるしかない。ミルク10さじずつナイロン袋に分けて行ったが、ナイロン袋はすぐに底をつき後は茶封筒である。衛生上のこともあり情けない気持ちになる。どの物資についても言えることだが、一体どれ程の数送ってもらえるものなのか全く予測がつかず、分け方に苦心した。予めファックスででも知らせて頂ければ有り難いのに、と思ったのはぜいたくであろうか。この日は、粉ミルクの他、衛生材料や医薬品等、たくさんの救援物資が届き、荷物運びに追われた。山積みになった医薬品類を、主にボランティア看護婦の方々に分類、整理して頂いた。また、救護所の位置を、入り口に近い一角に移した。

翌日からは、一般薬、衛生用品の窓口配布を始めた。しかし、この時もまだ紙オムツ類等数少なく、小分け配布が続いた。その後、場所をさらに1階会議室に移し、処方薬、OTC薬、衛生用品と分けて整理し、外に机を起き「救護受付」とした。診察室としては、福祉事務所面接室を借り、医師、看護婦の方に常駐して頂けるようになった。「救護受付」で住所氏名を記入してもらい、診察が必要な方は、診察室へ案内し、診察後医師の処方薬を渡す。薬だけ欲しいと言う方には、薬剤師の指示のもとOTC薬を配布。かぜ薬が飛ぶように出る。衛生用品の配布は主に一般ボランティアの方々にお願いした。その他、各医療班が持って行かれる薬品の準備、避難所で不足している薬や衛生用品の配達、等々。また、常に在庫を把握し、不足分、必要分を補充しておかなくてはならない。薬品類については、私達職員がほとんど素人のため、ボランティア薬剤師の方に1から教えて頂き大変有り難かった。こうして、大勢のボランティアの方々に助けられ、救護所としての体制がしばらく続くことになった。

(c)1995神戸市中央保健所(デジタル化：神戸大学附属図書館)

阪神大震災 : 保健所からの報告 . - 発行:神戸市中央保健所, 1995.7. 請求記号:震災-10-224 p.19

震災当日の長い一日

衛生課　運転手　尾上　正喜

「今の神戸は一体どうになっているのだろうか？」と思いながら車で家を出ました。

鈴蘭台を過ぎ小部トンネルを抜けると南側の空が真黒の煙と雲におおわれており、車のフロントガラスにススみたいな粉が飛んできました。

市街地に入ると民家があちこちで倒壊し、ビルは傾いたり押し潰され、一部で道路にはみだし、さらに道路自体にもあちこちに亀裂や陥没ができているため、走れない所を避けながらやっとのことで保健所にたどりつきました。

そして衛生班室に入ると室内のロッカーは倒れ机や椅子は移動し、書類があたり一面に散らば「ており足の踏み場もないぐらいでした。

5階の事務所まで階段で上がってみると、これが保健所かと思われるほど机・ロッカーや書類等が散乱しており、何から手をつけたらいいのかわからないほどの状態のなかで保健課の門間さんが一人でガラスの破片を掃除していました。

保健課長席の電話のベルが鳴り響いていましたが、カウンターや机などを乗り越えてしか行けない状態でした。またこの電話しか通じていなかったため、とにかく通路を確保しなければと思い、片付けをしていたときに森本衛生課長が来られほっとしました。

その後事務所の片付けもそこそこに、局からの「倒壊した西市民病院の患者を他の病院に搬送してほしい。」との要請により西市民病院まで馳せ参じることになりました。ところが保健所を一歩出ると道路はひどい渋滞でなかなか前に進みません。いつになったら着くのだろうと時計を見つめながら車を運転し、普段なら20分位で着くのに1時間余りかかりました。

病院に着くとそこには病人や負傷者がおおぜい運び込まれており、救急車や他の事業所の応援の車でいっぱいでした。新聞社やテレビ局のカメラマンなどの報道陣で混乱している病院前の駐車場で負傷者を乗せ、西区の久野病院まで公衆衛生課の中筋君と2台の車で出発しました。

病院を出たとたん、再びものすごい渋滞にまき込まれました。20分ぐらいたつのに1キロも進まないのです。ちょうどその時前にいた自衛隊のジープに患者搬送のことを話すと、西神戸有料道路まで誘導してくれて大変ありがたかったです。

しかし、そこからがまたひどい渋滞でなかなか前に進みません。仕方がないのでパッシングランプを点けながら中央車線・路肩と車をかわし、早く着きたいとの一心で安全運転をしつつ進まない車にイライラしながら2時間近くかかって久野病院に着き、患者を無事入院させることができほっとしました。その後再び西市民病院まで戻るのに2時間かかってしまいました。

西市民病院に戻ると今度は「遺体の搬送をしてほしい。」と指示され、報道陣で混雑するなかを再び中筋君と二人で長田区の避難所の体育館に行き、遺体の足に名前を書いた札を付けて畳に乗せ、これを避難者と一緒に車に乗せて村野工業高校の体育館への運び込みを3往復しました。体育館の中はもう遺体が100体以上も寝かせてあり地獄を見ている様でした。やっとのことで遺体の搬送も終わり保健所に戻る道路は、往きは通行できたところが柏井ビル倒壊等により通行止になっていたため迂回に迂回をかさねて保健所に何とかたどり着きました。

保健所に帰ると休む間もなく森本課長に岡山県の日赤医療救急車の避難所への誘導を指示され、臼杵君と共に小野柄小学校へ行くと校庭のあっちこっちで避難者が焚火をして寒さを凌いでいました。

ハンドマイクで「けがや病気の人はいませんか？」と呼びかけると、初めは2～3人ほどしか治療にきませんでしたが「治療は無料だ」と聞くとたくさんの人が集まって来ました。これらの避難者は何も持たずに避難してきた人が多く、これからのことで頭がいっぱいのようで落ち着かない様子でした。

このように一瞬の地震での被害の大きさと凄さには本当に言葉がありませんでした。

(c)1995神戸市中央保健所(デジタル化：神戸大学附属図書館)

阪神大震災 : 保健所からの報告 . - 発行:神戸市中央保健所, 1995.7. 請求記号:震災-10-224 p.20-22

1月17日から19日にかけての行動記録及び感想

衛生課　防疫手　臼杵　保志

1月17日（火）午前5時46分、阪神淡路大震災発生。自宅（神戸市北区花山台）おいても、激しい揺れが突き上げるように襲いかかってきた。

まず気になったのは、言うまでもなく家族の安否だった。幸い家族全員の無事が確認され一安心したのも束の間、猛烈なガス臭が漂っていることに気づき、慌ててガスの元栓を閉めて回った。その次に隣近所の住人の安否、それと建物の安全確認に走らねばと思ったのだが、家じゅうの家財類は飛び散らかっていて、元の配置の様子さえ全くとどめていなかった。それを乗り越えて戸外へ出てみると、建物の崩壊といったような最悪の事態には至っていないものの、案の定あちこちでガスが噴き出しており、お年寄りの世帯から順に声を掛けて安否確認をし、ガスを閉栓して回った。この時点では、これから始まる地獄のような震災との戦いについて、まだ想像することすらできていなかった。

午前7時前、あとの事は家人に任せ自家用車で中央保健所に向かった。途中同僚の尾上氏と落ち合い、新神戸トンネルに差し掛かったところで、停電により通行止めとなっている事を知る。迂回を余儀なくされ、ようやく保健所に到着したのは午前10時30分であった。このとき、我々2名以外に出勤していたのは、保健課の門間さんだけであった。

市内全体がただ事ではない状況に陥っていることは容易に判断されたので、直ちに本庁へ電話連絡を入れたが、そこも人手不足で、責任ある指示判断を仰ぐことは不能な状態であった。

午前11時30分、森本衛生課長が到着。中央区対策本部にて区内被災状況の把握に努めるが、まだこの時点では詳細は不明であった。情報網の途絶と人手不足に対して焦りが募る中、12時40分になって本庁の公衆衛生課から、出動要請を受けた。西市民病院の倒壊に伴う患者搬出出務の依頼であった。

私と尾上氏の2名が、それぞれ保健課公用車と衛生課ミストカーとに分乗し、直ちに西市民病院へ応援に向かった。到着と同時に3名の患者と看護婦を乗せ、液済会病院と労災病院へと搬送した。西市民病院に戻ると5時近くになっていたが、直ちに次の患者2名をポートアイランドの中央市民病院へ搬送。

この頃、保健所においては、区対策本部からの要請を受けて救急救護班設置に努めていた。保健課医師および兵庫保健所保健婦1名を確保し、救護班が設置できたのは、午後7時30分のことであった。

一方、中央市民病院への患者搬送は、その後も更に2回続き、10時30分頃終了したが、休む間もなく西市民病院から村野工業高校へ遺体搬送の依頼があり数往復した。

1月18日の午前0時30分、ようやく中央保健所に帰庁した。

朝食をとらなかったのは、ミスであった。17日は結局、何も食べずに過ごすはめになったからだ。夜中に西市民病院で貰った飲料水がどれほど旨く有り難かった事か。

それはともかく、最初に搬送した3名の患者のうち1名は血まみれの乳児だった。聞くとその子の母親は、まだがれきの中に埋まったままだという。病院の廊下には、至るところ毛布にくるまれた遺体が転がされていて、どこかで爆弾が落ちたのかとさえ思える程、ひどい惨状であった。

そんな状況下において、わたしの車に同乗してくれた看護婦さんの、勇気にあふれしかも落ちついた行動には、全く感服するばかりなので、この際特筆しておきたい。大渋滞の交差点では、降車して巧みな手信号で誘導してくれたし、通行路を遮断している電線があれば、電気が通っている可能性もあったのに、危険を承知で足で踏みつけ、車が通過できるようにしてくれた。渋滞で進めなくなれば、歩道を

走るよう助言してくれた。これらの機転と気丈さには、自分自身の反省を込め、ただ頭が下がる思いであった。
　それにしても、警察はパトカーでの先導などしてくれなかった。患者の命が一刻を争っている状況だというのに、なんとか優先させてもらえないものなのだろうか、という個人的な感情を抱いたのは言うまでもない。
　さて患者搬送の後、待っていたのは、遺体搬送であったが、これまた悲惨の一語に尽きる状況であった。今から思えばあれがクラッシュ症候群というのだろうか。見た目には大きな外傷などの損傷はなかった。只、遺体をくるんだ毛布には、先ほどまで生きていた事を如実に物語るかのように、本人が生前に書き残した連絡先などのメモが貼り付けてあった。髪の毛は砂だらけ。多くは寝間着姿で裸足であった。それらは言いようのない哀れみと無情感を誘い、心の中に真っ黒な穴がぽっかり開いたような気分だった。
　遺体搬送先の高校では、既に朝から100体以上が運び込まれ、作業にあたっていた市職員には、疲労の色が濃く現れ、それでなくとも重く感じられる遺体を、もはや6人から8人がかりでしか運べないほど疲れきっていた。やはりここでも、圧倒的に人が足りない。そんな状況に、私は何処へ怒りをぶつけていいのか、わからなかった。
　遺体搬送を終え、中央保健所へ戻る途中、真っ暗な加納町三丁目交差点で、その先昼間まで傾いていたビルディングが倒壊して通行止めになっていると言われた時は、本当に驚いてしまった。一体この先何が起きるのだろう。

　1月18日の午前0時30分、中央保健所に到着した岡山県日赤医療班の救急車を先導して区内の若菜・二宮・吾妻・小野柄・葺合保育所等の避難所へ案内巡回するという仕事が、直ちに遂行された。一避難所あたり約一時間ほどかけて医療班による救急医療が実施され、この日の早朝に終了した。
　1月18日午前6時、保健所長および保健課長に対して状況報告ならびに今後の対応策についての相談がなされた。
　1月18日も、昼前から、続々と到着した他自治体、団体等の医療班を各避難所へ案内する業務が続いた。
　1月19日は、王子公園陸上競技場に仮開設されたヘリポートに、緊急救援物資が間断なく空輸され始め、このうち医療用薬剤・機材、防疫用薬剤等の受取りおよび搬送を担当することになった。
　同日午後3時30分に帰所した後は、手洗い用消毒液の配布など、ようやく本格的な各避難所への防疫活動を開始することとなった。

　地震発生から18時間経過した真夜中に帰庁したのも束の間、おにぎりを1個食べただけで、仮眠をとる暇もなく、次の仕事にでかけねばならない。代わりの人間が居ないのだ。出かける車に、保健所内の備蓄ガソリンを補給しても、残りは僅か。一体いつまで動いてくれるか、誠に心もとない限り。しかたなく各避難所ではエンジンを切るが、これまたとても寒くて、そのうえ空腹で、連絡を取りようもなくたとえ取れても何も期待できないという孤独感も手伝い、惨めな気持ちに襲われた。
　乳児用ミルクを持ち出せなかった母親が多く、保健所に確保を求めるが、在庫が無いとの返事。とにかく至急確保を依頼した。他にも、食料や飲料水を求める市民が、次々と押し寄せるが、遠からず救援がくるので病人以外は助け合って我慢してくれと説得し、なんとか納得してもらうことで精一杯だった。こういう場合では、嘘がいけないのは勿論だが、市民がパニックに陥らないよう安心感を与える努力が必要である。
　しかしそれにしても、どの避難小学校とも被災市民であふれ返り、昨日まで何事も無く平和に暮らしていた人々が、何故このような悲惨な状況に陥らなければならないのか。そのことで私の胸は悲しみで

一杯になったのであった。
　このような最悪の事態にあって、ようやく光明を見いだし、希望が涌いてきたのは王子ヘリポートに次々と届けられる救援物資を見た時だった。このとき私は初めて心に落ちつきを感じられるようになった訳だが、その頃より出勤し始めてきた職員の方にとっては、とてもまだそのような気持ちにはなれなかったことだと思う。震災当日から出務し続けたことは、筆舌に尽くしがたい苦難に満ちた激務ではあったが、一方で貴重な体験でもあり、その全てを語るのは困難だとしても、その一部でもよいから他の職員の目に触れ、何らかのお役に立てれば幸いと考えている。

(c)1995神戸市中央保健所(デジタル化：神戸大学附属図書館)